



# 道徳と宗教の関係を問う

道徳科学研究所 客員教授

田島 忠篤

廣池千九郎博士（一八六六—一九三八）は、なぜ宗教ではなく道徳、しかも道徳科学を創建したのでしょうか？この問いに応えるためには、まず両者の関係を問う必要があります。その手始めとして、宗教の概念について日本の宗教事情に照らして精査する必要があります。その理由は、「宗教」という言葉が明治初期にreligionの翻訳語として定着したからです。仏教学者の中村元（一九二一—一九九九）によると、中国語

典に使用された「宗教」を訳語に充てたそうです。その語源はインドですが、漢字に翻訳された時、宗Ⅱ一つの絶対的真理、教Ⅱ各宗派で異なる教えになったそうです。

## 宗教を構成する四つの指標

さて、religionについてはフランスの社会学者エミール・デュルケーム（一八五八—

一九二七）の概念が有名で、それは四つの指標から構成されています。一つ目は俗から峻別された「聖」、二つ目はそれを正当化する「神話や教義」、三つ目は一と二に基づく「儀礼」があり、最後は一から三を実践する「道徳的共同体（集団）」があるということです。この共同体は、部族単位から地球規模の教会組織まで含まれます。

## 宗教的要素が溶け込んでいる日本文化

しかし、この宗教概念を日本人の宗教事情に当てはめるとズレが生じます。例えば、令和三年版の『宗教年鑑』によると、宗教学法人数は全国のコンビニエンスストア数の約三倍となる一八万件あり、その信者数を合計すると総人口の一・四倍になります。それなのに宗教を信仰していると答える人は三六%しかいません。

また、コロナ禍の令和四年の年中行事や通過儀礼の実施状況を見ると、初詣は四九・三%、墓参は六三・九%の人が行っており、クリスマスにいたっては約半数の日本人が祝っています。宗教施設を訪れたり、儀礼を実施したりするわけです。宗教行為に該当しますが、宗教に所属しているとは考えていないのです。むしろ宗教的要素・宗教性が、年中行事や葬送儀礼に代表される日本文化に溶け込んでいるのが特徴のようです。

東京大学教授・伊達聖伸の「ライシテ（政教分離）」研究によれば、フランス革命時、宗教を政治から切り離し、道徳からカトリックを剥離させたが上手くいかず、結局、中途半端となったそうです。当時の学者には、何とか宗教と道徳の本来の一体性・関連性を証明したかったようです。デュルケームもその一人でした。

廣池博士は、宗教を否定する啓蒙主義者とは異なり、道徳との一体性・関連性を基礎に置き、研究しました。それは日本の宗教事情にも合致したものであったと考えられます。

※令和四年十二月二十一日に開催した「モラロジー研究会」の内容の一部です。